

又傳教滅後惠心已來の本覺法門の終窮歸結と云ふべきだ。

茲に於てか眞淨の念佛易行、天台の理觀精修何の面目がある。噫大なる哉本化の教觀、仰で信すべく伏して思ふべしだ。

(六) 結 論

聖德太子に胚胎し、傳教大師によつて教理的基礎を得た「三佛冥合」「鎮護國家」の理想は吾祖の「三

大秘法」「立正安國」の金策となり延て二陣三陣の殉教的犠牲の努力奮闘は之が具現化を物語つて居る。翻つて日本佛教の變遷過程を顧るとき、悉く是れ吾が本化一大圓教宗、結論への先序であつた根本大師の後五百歳遠活妙道と云ひ、且つ正像過稍已末法太有近の羨望と嘆聲を聞くまた宜哉である。

己上

成佛論祖判文證類集

藤 田 沼 南

祖判題名	作地	著作年次	寶算	縮遺頁數	大本遺文錄了數
戒体即身成佛義	清澄	仁治三年 (又ハ云文永三)	二十一	一〇	二十
一生成佛鈔	鎌倉	建長七年	三十四	一四 一七	十四 三十七

御妙 法返 尼御 事返	内證 佛法 血脈	一念 三千 法門	六難 九易	始聞 佛乘 義	即身 成佛 義	〃	撰時 鈔	法華 初心 成佛 鈔	成佛 用心 抄	秀句 十勝 抄	法花 題目 抄	女人 成佛 鈔
身延	〇佐 谷方 渡	鎌倉	〃	〃	〃	〃	〃	〃	身延	塚原	清澄	安房
〇弘 元安	文永 十年	正嘉 二年	弘安 元年	建治 四年	〃	〃	建治 元年	建治 三年	建治 二年	文永 八年	文永 三年	文永 二年
(五十七)	五十二	三十七	〃	五十七	〃	〃	五十四	五十六	五十五	五十	四十五	四十四
一、七五一	九二〇	二、一〇	一、七四一	一、七二三	一、二七一	一、二〇九	一、一八九	一、六九二	一、五二三	七一八	五九、四〇五	五二九
廿五	十四廿六	四十四	二五初	廿四十五	十九十七	卅六	十八十五	廿四廿六	廿三	十一、五十四	十一	九十三

御妙 法返 尼御 事前	〃	〃	〃	〃	〃
〃	〃	〃	〃	〃	〃
弘 安 四 年	〃	弘 安 三 年	〃	弘 安 二 年	〃
六 〇	〃	五 十 九	〃	五 十 八	〃
二、〇八九	一、九八一	一、九六四	一、九〇三	一、八九七	一、七五六
三十卅八	廿九四	廿八卅六	廿七卅七	廿七卅二	廿五十四

三熱の炎と偉大なる暗示

荒 木 經 明

以上^ハ即身成佛論ノ文證ト見^{ルベキモ}也中^ニ於^テ天台附
 順佐前ノ御作^{アリ}在島本意顯發ノ御著作^{アリ}佐後流通還
 昔ノ作^{アリ}而^{シテ}又對告衆^ニ隨^テ內證外用一途^ヲヲラザル^{アリト}雖
 要^{スルニ}當家^ハ成佛^ヘ十界所有^ノ當相^ヲ本覺^ノ眞体^{トスルニ}
 結歸^{スルニ}在^{リト}可謂也
 然^{リト}雖諸先哲ノ議各々異点有^之大^ニ研鑽^{スベキ}義門^{ナリ}
 吾人^モ又時^ヲ得^テ自己^ノ見解^ヲ發表^{セシ}事^ヲ期^{スト}雖^モ今^ハ唯
 先^キ學師^カ余^ニ授^ケラレシ成佛論祖判文證類集^ヲ提^グル^而
 己^之以^テ斯道攻究者^カ鑽仰^ニ一助^ヲ吾^ガ意既^ニ滿足^シ

現實の吾々の生活を考へて見れば、全く手も足も
 出ない様に迄威容を失墜せられ、而かも、其中に
 自己の生活を、少分でも完全に、若しくは、幾分
 でも不満なく送つて行かんとして東西に急ぎ、南
 北に走り焦慮すること他その見る目もいたましい
 くらいである。其中に高貴の人あり、賤之男あり